

高等教育機関との連携PT・関西経済同友会共催 経営者と大学生の未来創造フォーラム

高等教育機関との連携PTは関西経済同友会との共催により、経営者と大学生が未来の展望やキャリア形成について意見を交わす「経営者と大学生の未来創造フォーラム」を開催した。フォーラムは2025年3月に続く2回目であり、関西圏では初めての開催となる。関西圏の大学生120人と経営者29人が参加し、活発な議論が展開された。グループディスカッションでは、二つのセッションで学校や世代や立場を超えた意見交換が行われた。(所属・役職は開催時)



開会挨拶



日色保

副代表幹事
高等教育機関との連携PT 委員長
ウォルト・ディズニー・ジャパン
取締役社長

人が集まった。多くの学生の皆さんとさまざまな議論ができることを楽しみにしている。本フォーラムは堅苦しい会議ではない。思っていることは何でもぶつけて構わない。経営者だけでなく他大学の学生ともいろいろな意見交換をして、刺激を得て帰ってほしい。

高等教育機関とつながるという課題意識から プロジェクトチームを立ち上げた

経済同友会では、25年以上前から経営者が学校を訪問する出張授業を継続して実施してきた。中学校・高校での授業を多く行ってきたが、職業観という意味では中学生・高校生だとまだ具体的なイメージを持ちにくい面もある。そのため、より高等教育機関としっかりとつながるべきではないかという課題意識があり、「高等教育機関との連携PT」を立ち上げた。

同PTでは、経済同友会と高専や大学生・大学院生とのかかわり方について検討を重ね、経営者のカバン持ちを体験する「ジョブシャドウイング」などさまざまな活動を進めてきた。その一環で立ち上げたのが本フォーラムである。大学生と経営者が一堂に会し、ディスカッションすることで将来のキャリアについて考えるのがテーマである。昨年3月に初回を東京で開催し、好評を得たことから、第2回は関西経済同友会と共催で開催しようとなり、今回の開催に至った。

昨年の東京開催では約60人の大学生が参加し、本日は120

◆経営者と大学生の未来創造フォーラムとは

経済同友会は2024年度から、学校と経営者の交流活動推進委員会の下に「高等教育機関との連携PT」を設置している。企業の人材戦略や求める人材像の変化を踏まえた高等教育のあり方をテーマにさまざまな活動を行っている。本フォーラムは、大学生のキャリア形成や職業観の確立を後押しする取り組みとして昨年度から開催している。経営者との直接対話に加え、他大学の学生との交流を通じて、仕事の意義ややりがい、将来ありたい姿を実現するためにどう行動していくかを考えるきっかけと気づき、学びを育む機会を学生に提供することが目的である。当日は経営者1人と大学生4～5人のグループに分かれてディスカッションを行い、終了後は新たなつながりを築く場にしてもらうため参加者同士が自由に交流できるネットワーキングの時間も設けた。

本会ホームページ掲載記事参照



グループディスカッション

【セッション①】

AI時代に求められる
人間の力とは？

人間自身が目的や価値を生み出していくこと

「AI時代に求められる人間の力とは？」をテーマに議論を行った。AIが高度な分析や作業を担う社会では、人間に求められる役割も変化していく。グループディスカッションでは、人を動かす思いや共感、強い意志や夢、AIを使いこなす力、そして芸術や感情、コミュニケーションといった人間ならではの能力など多様な視点から意見が示された。AIを活用しながら、人間自身が目的や価値を生み出していくことの重要性が共有された。

学生発表ダイジェスト

- AIがアイデアを生み出す時代になっても、その背景にある思いや共感が人を動かす。人間らしい感情や動機が重要だ。
- AIは知識や分析を支える強力なツールだが、責任を取ることにはできない。人間が強い欲や夢を持ち、AIを使いこなすことが重要だ。
- AIから適切な情報を引き出すには、何を知りたいのかを明確にする力が必要となる。情報を評価し、自分なりに整理する力も求められる。
- 運動や音楽、芸術など人間の感情や身体感覚から生まれる表現はAIには再現できない価値を持つ。
- 同じ状況でも捉え方によって意味は変わる。日常の出来事を前向きに解釈する発想力も人間らしい能力の一つだ。
- AIは情報を提供できても、相手の性格や状況を踏まえた助言は難しい。人間同士の関係性が重要になる。
- 人間は表情や声色、雰囲気など多くの非言語情報を読み取ってコミュニケーションを行っている。
- AIは既存の知識を基に回答するが、新しい価値や発想を生み出す力は人間の重要な役割となる。
- 人間が自ら目標を設定し意思決定を行うことが重要だ。
- 最終的な判断や責任を担うのは人間である。意思を持って決断することが人間の役割となる。
- AIの普及により、一定水準の成果は誰でも出せるようになる。その中で個人の意思や価値観がより重要になる。
- AIとの共存は厳しい競争を生む可能性もあるが、その変化を前向きに受け止め挑戦していく姿勢が求められる。

【セッション②】

「自分が思い描くキャリア観」「自分が取り
組みたい社会課題」「起業について語る」「まずは行動してみる」という姿勢
挑戦の積み重ねが未来を形づくる

起業や社会課題への取り組み、多様な価値観の受容など幅広いテーマについて意見が交わされた。多くのグループで、「まず行動してみることの大切さ」が共通して語られた。将来の目標から逆算してキャリアを考える学生もいれば、興味や経験を積み重ねながら方向性を見つけていきたいという学生もおり、キャリアの描き方は多様だった。一方、地域の1次産業の担い手不足や国際格差、環境問題など、社会課題に関心を持つ学生も多く、企業との協働や技術革新への期待も語られた。

学生発表ダイジェスト

- 「何でもチャレンジした者勝ち」だ。まず行動してみることが経験となり、将来の選択肢を広げると実感した。
- 大きな目標を実現するためには、短期の目標を設定することが大切だ。自分が「楽しい」と思えることを続けることが成功の鍵になる。
- 「やりたいこと」「できること」「社会に価値を生むこと」の三つを重ねながら、キャリアを考えていきたい。
- 地域の農業や漁業の担い手不足、流通の課題など、地域社会の持続可能性について議論した。
- キャリアの考え方は人それぞれだ。目標から逆算して考えるタイプと、経験を積みながら方向性を見つけるタイプの違いも共有された。
- 発展途上国と先進国の格差をなくしたいという思いから、留学生と日本人学生をつなぐ活動に取り組む学生もいる。
- 異なる大学や分野の学生と交流することが重要だ。対話を通じて視野が広がることを実感した。集まることで、新しいプロジェクトの可能性も見えてきた。
- キャリアはまだ明確でなくてもよい。興味のあることに挑戦しながら、自分の形をつくっていけばよいという意見もあった。
- 社会課題に取り組む学生と企業はどのように協働できるのか。企業が学生に何を期待しているのかを知りたいという声が上がった。
- 環境問題などの解決策は、良い技術だけでなく、誰もが使える価格で提供されてこそ社会に広がる。

経営者と大学生の未来創造フォーラムを振り返って

桜井 伝治

NTTインテグレーション
取締役社長



アンケートでは98%超の学生が満足と回答 全国への広がりを目指したい

AI時代における人間の力とは何か。私たち経営者も決して正解を持ち合わせていない問いである。この問いについて大学生とフラットに対話することで、経営者が変化にどう向き合い、どのような思考・行動様式で対応しているのか、気づきを届けられたのではないかと思う。一方で私自身も、大学生たちがこの新たなイノベーションをどう受け止め活用しているかに触れ、大学教育が今後どう変わるべきかを考えるきっかけとなった。昨年の東京開催に続き、関西経済同友会との共同開催を成功裡に終えた意義は大きい。事後アンケートでは参加学生の98%超が満足と回答しており、世代を超えた対話への確かな手応えを感じている。今後は他地域の経済同友会にも参加を呼び掛け、全国への広がりを目指したい。第3回は再び東京での開催を構想している。最後に、献身的にご尽力いただいた両会事務局スタッフの皆さまに心から感謝申し上げます。

小川 成子

NTT西日本
執行役員



学生・経営者の対話をもたらず気付きは 想像以上に深い

立場や世代を超え、率直に言葉を交わす価値をあらためて実感した一日だった。AIやキャリアを巡る対話を通じて、学生は自らの未来に向き合い、経営者は若い世代の感性や価値観に触れることができた。双方の対話をもたらず気付きは想像以上に深く、フォーラムの意義をあらためて実感している。学生と直接対話の中で、彼らの期待や悩みなどを受け止めることができたことは大きな収穫だった。また、キャリアに関する問いに向き合うことで、将来を考えるきっかけの一つを提供できたと感じている。参加した学生・経営者双方の満足度も非常に高く、今後も継続して実施していきたい。本フォーラムを共に創り上げ、知見を分かち合ってくださった経営者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

◆◆◆ 閉会挨拶



三笠 裕司

関西経済同友会 代表幹事
日本生命保険
副会長 執行役員

積極的に議論を交わした 実りあるフォーラムだった

今回このような素晴らしい機会を東京の経済同友会とご一緒させていただいたことに御礼を申し上げます。昨年度、交流したときに「何かできないか」という話が形となって実り、関西経済同友会としても大変ありがたく思う。何とんでも今日の主役は学生の方々である。120人もの参加があり、われわれのような世代と話が合うのかと心配していたが、結果的にはわれわれが話すこと以上に、得るものの方が多かった。たまたま編成されたチームは大学もみな違

うのに、なぜこんなに話ができるのかと感じた。AI世代で毎日スマホばかり見て、人間と交流するのは苦手なのではという先入観は誤りであった。

このように積極的な学生がこれほど多くいるのは心強い。関西経済同友会では、私が委員長を務めた教育問題委員会を中心に、関西の学生が関西の企業で生き生きと活躍できる仕組みづくりに取り組んでいる。大学と産業界が協力し、社会の担い手として活躍してもらえ人間を育てていくという方針である。本日あらためて、皆がしっかりと取り組めば、良い学生、良い人材が育っていくのではないかと強く感じた。

開催にあたりご尽力いただいた東京の経済同友会に感謝申し上げますとともに、この素晴らしい場所をご提供いただいた立命館大学の関係者各位にも御礼を申し上げます。最後に、ここにいらっしゃる前途有望な学生の皆さんが、この社会を大きく変えていくことを強く期待したい。

高等教育機関との連携 PT の取り組み

ジョブシャドウイング・プログラム

学生が経営者に付き添い実社会を具体的に捉える

経営者の「カバン持ち」を一日体験する「ジョブシャドウイング・プログラム」を実施した。本年春は本会所属企業12社と大学生・大学院生



22人が参加した。本プログラムは、就職活動前の段階から学生が企業と接点を持ち、経営者がどのような視点で意思決定を行い、日々の業務に向き合っているのかを身近で体感することを目的としている。

参加学生は会議や打ち合わせへの同席、経営者との対話を通じて、企業経営の実態や意思決定のプロセスに触れ、多角的な視点や判断力の重要性を学んだ。また、企業が社会課題にどのように向き合い、価値創出を図っているのかを知ることで、働くことの意義や自身のキャリアについて考える契機となった。学生にとって実社会を具体的に捉える貴重な機会となった。

高専キャリアラボ

木更津高専の「キャリアラボ」学生と教職員に講演

木更津高専の25年度正課プログラム「高専キャリアラボ」(全学年を対象として企業人が講演する)全20回のうち5回を担当し、本会会員である経営者が、企業人に求められるマインドセットや多様なキャリアを拓くために必要となるスキル、自身の価値観や強みに基づく職業選択を実現するためのフレームワークなどについて講演した。また、講演を聴講した教職員から要請を受け、全国の国立高専の教職員に対し、社会変化に即した学生との向き合い方、高専生の活躍を促進するキャリア教育の考え方などについて講演を行った。

学生にとってはキャリアに関する視野の拡大、スキル取得への意欲喚起に、教職員にとっては自身のキャリア観の充実や業務への取り組み姿勢を再考する機会となった。これらの活動を拡大・深化することにより、即戦力人材の養成機関として需要が高まる高専と産業界の連携のモデルケースの創出を目指している。



大学院

博士人材増加の好環境実現を目指して 社会人大学院生と対話

博士人材増加の観点から、一定の実務経験を有し、自身の問題意識に基づき、40代以降で大学院に進学した社会人と経営者による少人数での対話を実施し、修士・博士課程の有用性や修士・博士人材の活用に向けた企業のあり方などにつき意見交換を行った。

社会課題が複雑化する中、理論を実践に応用する力を持つ社会人博士の産業界での活躍期待は高まっている。社会人博士人材の認知度向上を図るため、本会では博士である経営者(本会会員)の学位取得の動機やキャリアなどを可視化したロールモデル事例集を取りまとめた。自発的な学び直しと学びを活かした価値創出を阻害しない



環境づくりを通じて、イノベーション創出をけん引する博士人材が増加する好循環の実現を目指している。

教職員

大学職員による学生キャリア支援の質向上のために

大学職員のキャリア教育に関する意識醸成を目的として、25年冬に東洋大学と連携し、次世代を担う若手職員を対象に、2回にわたり研修を実施した。第1回目では、意識変容に焦点を当て、委員によるキャリア教育の重要性や社会からの期待に関する講演と、職員との車座対話を実施した。第2回目は、改革アイデアの具体化を通じて職員の行動変容を促す課題解決型の研修を実施した。委員によるファシリテーションの下、「学生のキャリア支援」をテーマにグループディスカッションを行った。参加職員に対して、自らの社会的役割や当事者意識を喚起させ、キャリア教育をはじめとする教育機関としてのあり方を再考する契機となっている。活動を通じて、学生を支える職員が産業界の求める人材像の育成に向けて幅広い視野を持ち、学生支援を行うことでキャリア支援の質向上を目指している。

